



モダンにも洋風にもさりげなく調和する、新しい「和の庭」を模索して

今回のテーマは「和」。住宅の新しいトレンドになっている「新和風」を、エクステリアでも提案したい。落ち着いた洗練を兼ね備えた和の庭をつくるには、どうすればいいのでしょうか。ガーデンデザイナー・井田洋介さんの実例を紹介しながら、和の庭づくりのテクニックを手ほどきしていただきました。



いだ・ようすけ
井田 洋介 ガーデンデザイナー、園芸研究家

1944年11月、大阪生まれ。東京都立園芸高校卒業。造園と園芸の店「アウトテリア民園」主宰。ガーデンデザイナー、グリーンコーディネーターの草分け的存在として、ガーデンデザインやコンテナガーデン指導のほか、NHK「趣味の園芸」「私のガーデニング」や雑誌、講演など幅広く活躍。著書は「リビングガーデン一庭で素敵に暮らす」(長岡書店)、新・庭のデザイン実例集5(家の光協会)、「小さな庭で楽しむ花」(NHK出版)、「園芸ミニ百科」(ひかりのくに)など多数。

和の庭ならではの「透かし」「障り」という考え方

日本の庭づくりには、伝統的な考え方があります。なかでもぜひ知っていただきたいのが「透かし」と「障り」。「透かし」というのは植木の剪定法で、枝が5本あったら2本は枝ごと切り取ってしまって3本にする。こうすると枝と枝の間隔があいて、枝の向こうの景色が透けて見えるようになります。これは、植木の風通しや日当たりをよくするためでもあります。枝越しに透けて見える景色を楽しむためでもあります。「障り」というのは、字のごとく障害物のこと。障子がまさにそうです。障子は空間を仕切りますが、完全に遮断するわけ

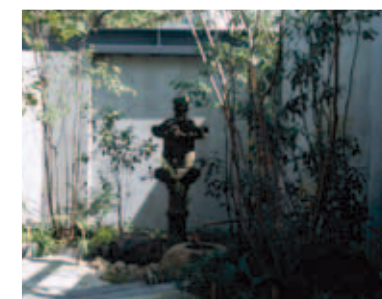
ではなく、そこに影を映すなどして奥の気配を感じさせてくれます。庭でいえば、株立ちの雑木を視線の手前に持ってきて、その葉や枝が、奥にある景色を遮るのも、「障り」になります。こうした「透かし」「障り」があると、人はその先の景色をよく見ようとして、じっくりと目をこらします。何の邪魔も入らずにささっと見渡せる景色は、狭くて平板に感じるのに、じっくりと時間をかけて凝視した景色は、奥行きと広さを感じさせ、なおかつ心に残ります。狭い庭に広がりや情趣を感じさせる、日本の庭づくりのテクニックなのです。そんな「透かし」「障り」を、ぜひあなたの庭づくりにも生かしてください。

Lesson 2

シャープなラインでモダンな和風に。手前に木を植えて奥行き感を

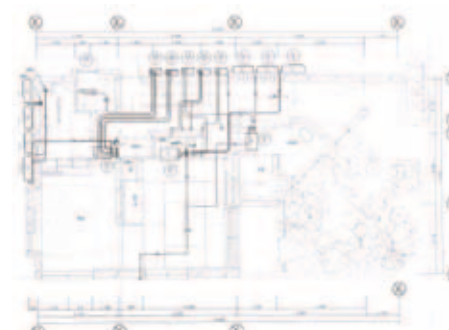
T様邸

今までずっと洋風の生活をされていましたが、年齢のこともあるのか、家の建て替えにあたり和風の庭を希望されたT様。コンクリート打ちっ放しの建物と塀に合わせて、モダンな和の庭を提案しました。床は長方形に切り出した御影石と大谷石を敷きつめ、シャープな雰囲気。これらの敷石を45度に並べた斜めのラインが、狭い庭に奥行きを感じさせてくれます。植木は雑木を中心に、野趣のある自然な庭に仕上げました。家からの眺めをよく計算して、建物に近い場所に株立ちの雑木を植え、視線を遮ることで、狭い庭に奥行きと風情を感じさせています。



シャープな長方形の敷石が、コンクリート打ちっ放しにも調和。斜めのラインが庭に広がりや奥行きを与えています。左手前に植えられた、株立ちのコハウチワヤアセビの枝越しに見る庭は風情があります。奥の塀につけたグレーの引き戸は、和風を意識して格子状に(下の写真は引き戸を引いたところ)。

ヤマモミジ越しに見えるつくばいと灯籠。石の使い分けや植物の配分も美しく、心癒される景色です。



Lesson 1

狭い北側の庭。日陰に強い植物を植え、明るいつくばいをアクセントに

S様邸

庭の奥に、和室の前の一角だけちょっと和の雰囲気がある、という依頼でつくった小さな庭。北向きなので、シダ類やギボウシなど半日陰でも育つ植物をセレクトしています。道路側に視線が抜けるので、狭さは感じませんが、道路からの視線を遮るために雑木を何本か植えました。日陰で薄暗い庭に、和風のわびさびだけではますます地味になってしまうので、つくばいとその周辺を明るくモダンにして、メリハリをつけています。

和室の前の一角にしつらえた小さな和の庭。日陰に強い植物を集めたので、北向きでも緑を楽しめます。重厚な飛び石とカラフルなつくばいの対比が美しい。



つくばいはインド製のごね鉢を転用。そのままでは白い色が飛び石に溶け込めず浮いてしまいましたが、まわりにブルーの砂利を敷いたため、飛び石とも自然なじみました。白とブルーの爽やかな色合いが印象的です。

